

所蔵品紹介—展覧会「野崎家の扇と能面」をふまえて
三宅 功一

1. はじめに

いま野崎家では毎年「野崎家のお雛様展」や、年末年始にかけて「カレンダー原画展」を行っているが、3人の学芸員が、それぞれの個人企画展示を担当し、年間になるとあわせて5回の展覧会が開かれていることになる。稿者は平成30年度「野崎家の扇と能面」を担当し、およそ60点ほどの扇を展示することができた。野崎家として、これほどのまとまった数の扇を展示したのは今までになかったが、それが実現したのは企画前段階にやるべきという声があって、言われたからという消極的な理由からであった。思えば扇に関しては、掛軸や屏風のような季節によって邸内で飾るために定期的

に替えられる為に使われてきたものに比べれば、登場の機会は少なく調査把握も遅れていた。そのため本展観より5年ぐらい前には、400本ほどの扇子と200枚ほどの扇面を写真記録として残す作業を行って、それは終えていた。なお扇子は両外側に親骨、その内側に中骨を含み、これらをあわせて扇骨というが、扇面は、それがはずされたか、最初から張られぬまま紙面のみ残したものである。ただ、それらの扇記録は多忙にかまけて整理が為されぬまま置かれてあったため、資料作成者以外の人間には参照のしづらさがあったのだろう。されば今回、扇に取り組むよう仕向けられたのも、帳尻あわせをするときがきたということであったやもしれない。それだからこのたびは、満を持してのご紹介ということで、扇というものについても少しだけ触れる。そのうえで拙くはあるが、何を考えて展観が行われたか改めてその意図をなぞっていきながら、野崎家の扇について概観していきたい。

2. 扇とは

「アフキ」という名前で呼ばれ、「ウチハ」とそれは区別されるものであったということが、源順(911-983)が編纂した『倭名類聚抄』の中に確認される。扇でも何でもかまわないが、おおよその発明品に関して日本にあるものが日本発祥と信じられるものはあまり多く



野崎家の扇と能面展チラシ



展示風景



桧扇(雛人形附属)

ないように思えて、扇もきっと中国から入ってきたのであろうと考えていたが、実はそうではなかった。東寺の千手観音像の内部からは元慶元年（877）銘の「桧扇」が見つかっているし、中国側の文献では日本の扇を「倭扇」とか「日本扇」などと呼び、人気の舶載商品であったらしい。桧扇というのは、木の板を複数とじあわせて、下端の中央に要孔（かなめあな）をあけたものである。製紙技術が中国よりも発達しておらず、紙が貴重であった日本に特有の事情で、公卿が式次第のカンニングペーパーに用いたとか、筆記用紙のかわりに懐中した木簡の束がその起こりであろうと中村清兄氏は述べている。

中国にはもともと団扇形式の、鳥の羽で作った羽扇（うせん）とか、竹や蒲葵などの植物で編んだ蒲葵扇（びろうせん）などあったが、さてここでとりあげたい扇とは、閉じたり開いたりすることができる「摺畳扇（しょうじょうせん）」とか「摺扇（しょうせん）」と言われるもので、紙は片張りである。絵を描けるのは紙が張られている表面だけで、それが両面張りになるのは時代がさらに下ってからのことである。中国の明時代、公には永楽帝のころ（在位 1402-1424）、中国側でも摺畳扇を模したものを製作するようになった。これには扇の中骨の両面側から扇紙が張られており、扇骨を張りこめる手法であった。この扇が「唐扇（からおうぎ）」として日本に持ち込まれ、その姿が室町時代の権力者や知識人の目を魅了し、席卷したことで、今の私たちのよく知る扇子に至るのである。

参考文献

中村清兄『扇と扇絵』、再版、河原書店、1983年。

河田昌之「扇絵概説」（『扇絵—日本・中国・朝鮮半島』、和泉市久保惣記念美術館、1990年。）

上野友愛「いざ、扇の国へ」（『扇の国、日本』、サントリー美術館、2018年。）

3. 岡山県ゆかりの作家

以上は単に先行研究をなぞっただけだが、扇がどうやら日本の独自文化として発祥したものであったらしいとわかった。では野崎家に所蔵される扇はいったいどのようなものであっただろう。扇というのはいわば現代のサイン色紙のようなお手軽なコミュニケーションツールにも使われたものであって、野崎家が所蔵する扇からも、交流活動を窺い知ることができよう。ここからは作家と作品について簡単に紹介するが、まずは岡山県ゆかりの人たちを中心にしてみる。

ところで実際に展示をした点数もなかなかの数となったが、それぞれを丹念に調査することができているわけではないので、読めたところは読むが、わからないところはわからないまま、ゆるく紹介するのでご容赦願いたい。



久我小年（くが しょうねん）「芦花蟹甲図」 大正 12 年（1923）
無腸公子／癸亥春晚寫於／梅莊小年



柚木玉邨（ゆのき ぎょくそん）「蘭図」
香祝／玉邨／寫



山田方谷 (やまだ ほうこく) 「七絶詩」

西湖柳を／うへける時／よめり／もろこしの／種とし／きけと／日のもとの／風にも／なひく／糸柳／かな／方谷老人



三島中洲 (みしま ちゅうしゅう) 「望嶽七絶二首」 明治 41 年 (1908)

(款記) 難波竹二君吟／余書望嶽二絶／賀 龍山野崎翁／周甲／七十九叟中洲毅



田辺碧堂（たなべ へきどう）「老松群峰図」 明治42年（1909）



衣笠豪谷（きぬがさ ごうこく）「芦雁図」 明治時代
寒沙集影／葦間先生／之法豪谷



井坂杏林 (いさか きょうりん) 「水草蟹甲図」 大正 13 年 (1924) ?
 人 / 皆 / 直 / 行 / 我 / 独 / 横 / 行 / 杏林生



井坂杏林 (いさか きょうりん) 「海草海老図」 大正 13 年 (1924)
 揺 / 鬚 / 勸 / 口 / 大正十有三年 / 星次甲子 / 四月下澣 / 杏林生口



日置忠尚（へき ただひさ）「金紋酒盃図自寿和歌」 明治 43 年（1910）
天地の／めくみの／御酒を／千代や／千代／くみ重ねける／菊かえ／盃
庚戌夏／八十二翁／謹白口忠

以上、岡山県ゆかりの作家作品として 9 点を選んだ。それぞれの人物や、作品についても簡単に見てみる。

日置忠尚（1829-1918）は幕末の岡山藩で家老をつとめ、雲外と号した。神戸で備前藩兵がフランス兵を負傷させた「神戸事件」では兵士を率いていた責任から謹慎を命ぜられるなど、困難な時期を過ごした。廃藩後は画家になつたらしい。丸っこくやわらかくそれでいてしっかりと書かれた文字は愛らしくもある。

井坂杏林は岡山の人であろうが、詳しいことはわからない。「犬養木堂と井坂杏林は朋友関係で、杏林は医師でしたが、木堂の社会活動を支援したり、芸術分野でも共に作品を作ったりしてい」たそうである（2013 年 11 月 30 日（土）～2014 年 3 月 30 日（日）開催「木堂と井坂杏林展」狸庵文庫美術館）。『吉備芸苑』や『桂露涓滴』に作品が収録されている。9 本の扇子が 1 箱に収められており、2 点を掲載しておく。「水草蟹甲図」では自分の生き方を蟹の行動規則になぞらえていて、作者の思いが伝わってきそう。年紀は書いてあったりなかったりするのだが、9 本中 5 本に大正 13 年とあるので、すべておなじとみてよいと思う。

久我小年（1868-1931）は浅口郡玉島村（倉敷市）に、柚木玉洲の子に生まれるが、玉洲はすでに玉邨を養子に迎えていたため、玉洲の妹（号：玉粹）の常が嫁した小田郡西浜村（笠岡市）の久我松韻の養子となる。名は苗啓、通称は早苗で、号は小年など。

南画を来舶画家の胡鉄梅に学んだ。古書画の鑑定や煎茶にも通じており、玉邨とともに『品茶譜』を刊行している¹。築庭家としても有名になり、かつて野崎家の別荘として使われた梅荘の庭園を造った。

作品は自らが作庭を行った梅荘で、上から下から蟹が描かれており、無腸公子とは蟹の異名。出展は中国の晋(265-420)において成立した『抱朴子』より「称無腸公子者、蟹也」から。まっすぐに歩かず、横歩きをする蟹は通常のふるまいを意に介さず、わが道をゆく。南画題によく取り上げられるように、周囲に惑わされないという生き方は、文人たちの憧れなのだろう。

柚木玉邨(1865-1943)は浅口郡玉島村(倉敷市)で、分家の柚木正兵衛の子に生まれ、柚木玉洲の養子となった。このあと、久我小年が生まれて養子に出されるわけだが、柚木家は天明元年(1781)に備中松山城主板倉侯を資金援助した功で藩に登用され、代々士籍に列し、文墨茶道に通じていた。玉邨は詩文を松田吞舟、鎌田玄溪、森春涛、三島中洲、高野竹隠、長尾雨山、土屋竹雨に学び、書を日下部鳴鶴、画を来舶画家の胡鉄梅に学んだ。南画を描くのであれば、漢文学を基礎に詩書画を学ぶべきであるから、漢文学なしに気韻生動を生ずる絵はできないと主張していた。中国を来遊した際は、清末民初を代表する画家で中国画学研究会を創設した金城(号:北楼)に出会った。玉邨の絵を見て、その落款を手で覆い、中国人が描いたものとまったく相違ないとまで言われたとか。²

山田方谷(1805-1877)は阿賀郡西方村(高梁市)の農商の家に生まれる。野崎家初代当主の武左衛門と、息子の常太郎の墓碣銘の撰文を行った。明治7年9月には方谷から、松山藩の有力御用商人として活躍した平松益造家の再建問題の嘆願書が野崎家に届き、同年11月7日より13日まで当地に逗留した。それに対し野崎家は5000円の融資を決め³、常太郎の後妻であった於相は常太郎亡き後、平松家に再嫁している⁴。

作品の詩は、山田方谷が菅茶山の家にあった西湖から取り寄せたという柳を詠んだものということが、森鷗外の『伊沢蘭軒』⁵中に見える。



久我小年(明治41年4月迨暇堂にて)

¹ 倉敷市史研究会 編『新修倉敷市史 第十三巻美術・工芸・建築』p.429、山陽新聞社、1994年。

² 藤井石童『柚木玉邨』美術日報社、1940年。

³ 太田健一「山田方谷・野崎武吉郎による平松家再興の取り組み」(『倉敷の歴史』第17号、倉敷市、2007年。)

⁴ 「野崎(昆陽野)家児島郡味野村」(ごさんべえのページ) <<http://gos.but.jp/nozaki.htm>> 2020年6月2日確認。

⁵ 森鷗外『伊沢蘭軒』は青空文庫でも読むことができる。<https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/2084_17397.html> 2020年6月2日確認。

三島中洲（1830-1919）は窪屋郡中島村（倉敷市）に生まれ、山田方谷の高弟。明治23年岡山県庁で貴族院議員選挙会が開催された折、野崎家3代目当主の武吉郎は疾病を理由に欠席したのに、投票多数（15点中7点）で依頼を受けることとなる。当初は辞退の決心であったが県知事等からの度重なる懇請によって、出馬を決意した。そして上京に際して貴族院議員としての礼法や被服の調製先、住居にいたるまで懇意に世話をしたのが三島中洲であった。麴町区五番町十二番地を仮住居とし、翌年十四番地の木造瓦葺2階建て60坪を住まいとした。なお大正6年に隣家に山県有朋が新椿山荘を建て居住する⁶。旧備前松山藩の山田方谷を介して、宮中筋に強い三島中洲との人脈があったことは、武吉郎にとって大きな支えとなっていたのだろう⁷。

作品については、明治41年の武吉郎還暦祝いに、難波竹二なる人物が詩を吟じ、それを中洲が扇に書き送ったようだ。25本の扇骨で支えられた金地に漢詩を賦した扇はしっかりしておめでたい場に似つかわしい。

田辺碧堂（1864-1931）は現在の倉敷市玉島長尾に生まれる。野崎武吉郎とは母親同士が姉妹でいここにあたる。碧堂は身体が弱く、正式な学校教育を受けず、兄に漢詩を、独学で欧米語や翻訳書で政治経済学を学んだ。野崎家へは明治25年に迎えられ、武吉郎が貴族院議員として東京に滞在していた折は、野崎家の筆頭理事として塩田経営に携わった。明治39年には野崎家を辞職し、翌年から日清汽船の役員として中国と日本を往来した。「絶句の碧堂」として名を知られ、碧堂の漢詩集『凌滄集』は中国で発刊された。

衣笠豪谷（1850-1897）は窪屋郡白楽市（ばくろういち）村（現・倉敷市白楽町）に生まれた。「豪谷」は総社にある名勝・豪溪に由来する号。幼少から書画を好み、詩画を石川晃山に、経学を阪谷朗廬に、文を森田節斎に学んでいた。明治に入った頃から数年、京都で中西耕石に南宗画法を学んだ。明治7年からは清に渡り名勝を訪ねてから翌年には日本の勸農局員の通訳として行動を共にし、帰朝後は勸農局や内務省、農商務省に勤めた。この時いろいろ持ち帰ったものの中に、上海、天津種の水蜜桃があり移植した⁸。

本作は芦の茂る水辺で憩う雁の姿を描いているが、「葦間先生之法」で描いたと言っているのも、その名を号にした中国清時代の画家、辺寿民を慕っていることがわかる。

⁶ 太田健一「詩と塩と茶に命を賭けた日本男児―手島知徳口述の紹介―」（『そるえんす』No.65、財団法人ソルト・サイエンス研究財団、2005年。）

⁷ 太田健一「野崎武吉郎氏、貴族院議員に当選・上京す」（『倉敷の歴史』第1号、倉敷市、1991年。）

⁸ 小松光雄『豪谷畫筭遺墨集』明石合同印刷株式会社、1915年。なお本書は豪谷没後10数年の後に出版されたが、著者は豪谷作品を取り巻く現在の情勢を次のように評価している。「断絹零墨すらなお人これを争うて珍重し。歳月と共に名声隆起するにいたる。これ真の巨擘といふべきか。」今では豪谷について一般に地元でさえ知られることはほとんどなかったように思うが、岡山県立美術館で特別展示「衣笠豪谷」（2019）が開かれた。好評だったようなので、今後の調査の進展と評価の高まりを期待したい。

芦と葦は両方とも「あし」のことで細かく言えば秋に穂が出て花開いたものが葦でそうでないのが芦ということになっている。辺寿民は葦の茂る水辺でぼろ家で無欲に過ごし、ひたすら葦や雁ばかりを描き続けたことで有名で、朝から晩まで雁を観察して描かれた作品は、自然の姿を見事に写し取ったとされ、「辺蘆雁」とまで称されていたという。辺寿民の作品に「晴沙集影」と題されたものがあり、水をたっぷり含んだ墨で描いているところや、雁の姿勢がそっくり参考にされている。

参考文献

岡山県歴史人物事典編纂委員会 編『岡山県歴史人物事典』、山陽新聞社、1994年。

4. 岡山県外の作家と野崎家

手前みそではあるが、児島の有力者として知られる野崎家が岡山県南地域で大きな影響力を持っていたことは当たり前であり、該地域のみならずもっと広く知られ、交流も繁くあったことを示そうとしたのがこの展示コーナーの目的であった。担当者の手腕が未熟なためにそれが伝わりきったとは言い難いので、こちらで自白しておかねばならない。広く全国から見るとはあったが、結果として京都生まれであったり、京都在住者が多くなったのには、やはり京都は文化的な集積地であることを改めて感じた。



山下蕉雨（やました しょうう）天保 9 年～明治 15 年（1838-1882）

「指墨牡丹蝶図」

富貴／国香／緑天／指墨

堺の一光庵住職で絵も描いていた。緑天は別号。赤と緑と黄と灰色の何かよくわからないものに見えるかもしれないが、牡丹と蝶である。牡丹は「富貴」花として知られ、唐の陳正封は「国色」「天香」と称えた。「指墨」なので指や爪で描かれる。即興芸のようなものなので場の雰囲気を楽しむもの。では指紋があるのかと会期中に何度か問われたが、右上部分を加工してクローズアップしてみた。



桜間青涯

（さくらま

せいがい）

天明 6 年～

嘉永 4 年

（1786-1851）

「雨中漁船図」

三河（愛知県）

岡崎藩主本多忠頭の家臣で、渡辺崋山に学び、椿椿山とも交流した。

明治 38 年（1905）、田辺為三郎より 5 円で購入。



上田丹厓（うえだ たんがい） 文久3年～昭和11年～？（1863-1936-？）

「庚午勅題図」 昭和5年（1930）

巖巖／削互／碧崔／嵬／影蘸／清波／面〃開／水國／年回／佳氣／動／海噉／乍照
／石屏／来／庚午歳旦／丹厓甕

削れた岩肌は青々として、水面には影が浮かんで、波があっちこちに立っている。水郷に新たな年がきて気分うきうき。水平線の向こうからたちまち朝日が昇ってきて岩山まで照らし出す。

丹厓は号で、名は甕、肥後に生まれ、京都に住んでいた南画家。頻りに野崎家を訪ねたり、野崎家からも京都の家まで掛幅の鑑定を依頼しに行くなど交流は多い。

庚午勅題は庚午の年（昭和5年）の勅題による。勅題とは、宮中で毎年開かれる歌会始におけるお題のことで、この年は「海辺巖」であった。絵も詩もふさわしく清冽な空気感をまとう作品。



橋本青蘋（はしもと せいひん）江戸時代～明治時代？

「松鶴高士図」 明治 41 年（1908）

松鶴高士／戊申初夏寫／奉賀／野崎尊台／華甲榮寿／青蘋女史房

野崎家の三代目当主である武吉郎の還暦祝いに贈られためでたい扇子。気品ある高士と二羽の鶴が、青緑で彩られ松竹梅もそろった景色に溶け込んでいる。画面中央にある緑色の腰掛は繡墩（しゅうとん）で野崎邸の庭にもいくつか置いてある。

青蘋は大阪の女流画家・橋本青江の娘。母娘で野崎家にたびたび訪れ、野崎武吉郎の長女・達も青蘋とともに青江から絵を学んだ。



曾根悟荘
（そね ごそう）
天保元年～
明治 7 年
（1830-1874）

「秋溪山水図」

仙台藩士のち京都に住んだ日本画家。



田能村直入（たのむら ちよくにゅう） 文化11年～明治40年（1814-1907）

「柳に蟬図」 明治24年（1891）

蟬晋弾／晩風／明治二十有四年／辛丑秋日寫意／直入山樵時年／七十有八

丸みを帯びたフォルムにくりくりとした目をした蟬が可憐。盛夏を過ぎても鳴いている蟬は、鳴き声がつつましやか、との意か。

田能村直入は大分県竹田市に生まれ、田能村竹田の養子になった。明治の南画壇の重鎮。



羽田桂舟（はねだ けいしゅう） 元治元年～昭和14年（1864-1939）

「長春図」

広島福山生まれの日本画家、迨暇堂に來邸記録あり。「長春」はバラの花の持つ意味による。南宋の詩人・楊万里が「此花無日不春風（この花に春風の吹かぬ日なし）」と詠ったことで、永遠の幸福を願う意味が付与された。輪郭線を用いないタッチで描かれたバラは棘があるけど柔らか。



森寛斎（もり かんさい） 文化11年～明治27年（1814-1894）

「古狸雨夜戴笠買酒図」（ふるたぬきあめによるにかさをいただきさけをかう）

題は台帳に従う。大田垣蓮月の「古狸酒もとむるや雨の夜のそのつれづれのすさびなるらん」という歌を寛斎が解釈。雨の中笠をかぶり、右手に酒、左手に通い帳（ツケで酒を購入するため店との記録が書かれる）をかかえた狸が愛嬌あふれる。

寛斎は長州藩の下級武士の家（山口・萩）に生まれ、幕末は京都と山口を往来する中で、児島下津井の荻野家に逗留していた。蓮月との関係は、森徹山のもとで同門であった和田月心が蓮月の住まいとしていた西賀茂神光院の住職であったため出入りがあったという〔佐藤節夫「蓮月と森寛斎」(『陶説』722、pp.37-40、日本陶磁協会、2013年5月号。)]。



山田秋坪（やまだ しゅうへい） 明治9年～昭和35年（1876-1960）

「海棠雀図」 大正10年（1921）

辛／酉／初夏／寫／秋坪

中津藩士の子（大分）。大阪に住み、花鳥画を得意とした。



宗星石（そう せいせき） 慶応3年～大正12年（1867-1923）

「石辺秋海棠図」

雁／来／館／小／集／席／上／作／此／星石

対馬藩主で貴族院議員で伯爵。迨暇堂に大型の扁額もかかっているし野崎武吉郎とは貴族院議員として同僚であったから、親しい交友が窺える。



杉溪六橋（すぎたに ろっきょう）

慶応元年～昭和19年

（1865-1944）

「春溪山水図」

明治36年（1903）

京都生、男爵。明治23年から5期35年間貴族院議員を務めた。画は宗星石と同じく大蔵雨村に南画を学んだ。

宗星石・杉溪六橋

「菊花図」

星衛人／寫黄花／六橋

菊の花と葉を星石が、六橋は緑色の草葉を描いた合作。





吉嗣拝山（よしつぐ はいざん） 弘化3年～大正4年（1846-1915）

「竹図五絶詩」

町絵師の長男として太宰府に生まれる。明治維新後は備中倉敷県の役人として一年ほど働いた。



青木木米（あおき もくべい） 明和4年～天保4年（1767-1833） 京都 生

「紅葉山水図」

京都栗田口に窯を開き、京焼の名人といわれた一人。「豊米」とあるので音を失ってからの作ということになる。



輝雲

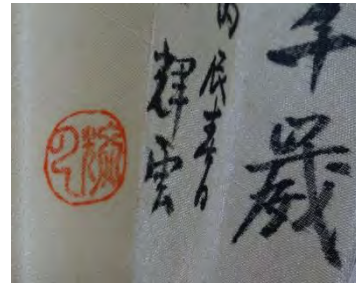
「石榴図」 大正5年（1916） 丙辰初夏寫／輝雲

墨の滲みで表現された石榴の質感がとてもよくて、飛んでる虫も可愛らしいし誰だかわからないが評価したくなった。



「松図」 大正5年（1916）

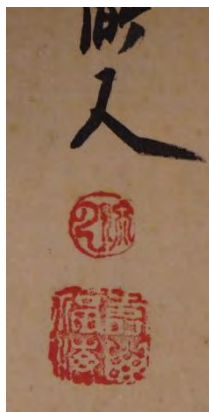
不老／千歳／丙辰春日／寫輝雲



<参考作品>

「春景山水図」個人蔵 大正6年（1917）

春江過雨／丁巳寫於白路画房 輝雲衛人



「輝雲」朱文丸印

「福壽山海」白文方印

なお「売用日記」によると大正5年5月4日に「画家友藤輝雲氏（神戸人）」が来邸しており、迨暇堂で書画を見せてあげたとのことで、ならば扇子はこの時のものであろうか。左の山水図は同時代の画家と十人並みな印象。



森直愛（もり なおよし） 天保2年～明治41年（1831-1908）

（表）「葡萄小虫図」 平安 森直愛

京都生、森寛斎の養子ではあったが森派を継いだのは、直愛の息子の雄山ということになっている。しかし画風や題材は森派から離れてはおらず品位に満ち、楚々としたものである。葉っぱには触角が長いのでキリギリスと思われる虫が一匹止まり、葡萄の実には金泥が用いられている。



（裏）「月に杜鵑図」

本作は表裏どちらも絵が描かれている。青白い月夜にホトトギスが飛んでいるらしい。



土佐光孚（とさ みつぎね） 安永 9 年～嘉永 5 年（1780-1852）

「蓬莱山図」 畫所預土佐守光孚

京都生、土佐派の別家 2 代目として、絵所預（えどころあずかり）となり、内裏造営において障壁画制作にかかわった。描かれているのは、州浜に蓬莱山（ほうらいさん）、松竹梅、鶴亀が配された祝画。



上田耕冲（うえだ こうちゅう） 文政 2 年～明治 44 年（1819-1911）

「華甲図」 明治 41 年

祝／貴族院議員／野寄大人還暦壽筵／九十翁耕冲画

耕冲 90 歳のとき、野崎武吉郎の還暦祝いとして贈る。親骨が塗りになって豪華。



近衛篤磨（このえ あつまる） 文久3年～明治37年（1863-1904）

「王維詩」 明治27年（1894）

人閑／桂／花落／夜／静春／山／空月／出／驚山／鳥／時鳴／春／澗中／明治甲午
芒種節／録王維詩／霞山人

中国唐時代8世紀の詩人 王維の詩を引用したもの。明治27年（1894）梅雨頃の作。
静かな春の夜の山中において、月がきらめき谷間の鳥が鳴くというような詩意。参考：
「王維 鳥鳴澗 碓豊長の詩詞：漢詩 Wang Wei」 <http://www5a.biglobe.ne.jp/~shic/i/shi4_08/rs462.htm> 2020年6月2日確認。

近衛篤磨は京都生、貴族院議長・学習院院長として政治・華族教育に尽力した。貴族院議員であった野崎武吉郎は親しく交友した。



木島桜谷 明治10年～昭和13年
（1877-1938）

「柳枝棲燕図」

京都・三条室町生、写生を基本とし動物画を得意とした。

大雅堂定亮 天保10年～明治43年
（1839-1910）

「秋郊茅舎図」





平尾竹霞（ひらお ちくか） 安政 3 年～昭和 14 年（1856-1939）

「菖石延年図」 昭和 2 年（1927）

菖石延年／昭和丁卯盛夏／七十二叟竹霞山人寫

丹波篠山（兵庫）を代表する南画家。靈芝は食べると不老不死の伝説がある。



原在泉（はらざいせん） 嘉永 2 年～大正 5 年（1849-1916）

「牡丹蝶図」 明治 37 年（1904）（平成 31 年野崎家カレンダー 5・6 月採用）

牡丹の大輪に蝶々が金扇にきらびやかに描かれる。「杭州舒蓮記莊監製各種雅扇發客」と書かれた箱に収まっており、舒蓮記は中国杭州の扇子業界 3 大名店と称された扇子舗のひとつ。原在泉は、有職故実（公家や武家の昔からのやり方に基づく様々なルール）はとても難しいのでそれを知る人は希少。



江上瓊山（えがみ けいざん） 文久 2 年～大正 13 年（1862-1924）
「祝賀扇」（表）「桃花春色図」 明治 41 年（1908）
（平成 31 年野崎家カレンダー3・4 月採用）
桃華春色／戊申清和月／恭祝／龍山老大人華甲／榮壽／瓊山景逸



（裏）「天保九如詩」

天保定尔以莫／不興如／山如阜如岡如／陵如川／之方至以莫不／増如月／之恒如日之
升／如南山／之寿不騫不崩／如松栢／之茂無不尔或承／書奉贈／龍山太翁六秩慶辰／
景逸拝

江上瓊山は明治期の長崎を代表する南画家であり書家。名は景逸、字は瓊山。京都師範学校教師として招聘されてからは京都に住まい、長崎へは母の家へ度々訪れた。

野崎武吉郎の還暦（六秩慶辰＝六十年のよき日）を祝う品。「天保九如」の書と青緑山水を表裏に画いた扇は、こうもりや寿字などの吉祥図案を金銀で刺繍し玉を飾った佳麗な袋に収め贈られた。「天保九如」は『詩経』より天子の長寿と平安を祈る詩に由来し、長生きを願う言葉。詩の中では「如」の文字が九つ使われている。

岡山県立美術館『塩田王野崎家 個性集う地方サロン』p.29、2013 年掲載。



徳川家斉（とくがわ いえなり） 安永 2 年～天保 12 年（1773-1841）

（表）「花丸図中啓」（平成 31 年野崎家カレンダー表紙採用）



（裏）「花丸図中啓」

中啓は扇の一種で、「啓」は開くの意であり、扇を畳んでもちゃんと畳みきらずに半開きになる。儀式用であるが、能の舞にも使用される。

ふちを赤く染めた扇に黒骨で、表裏に松、桃、撫子、菊、女郎花、萩、梅の花丸文を表す。能好きの十一代将軍徳川家斉の御筆とされる。阿部家五代藩主・

阿部正精は、家斉が老中に抜擢しており、拝領品と考えられる。備後国福山藩主阿部家の年寄を勤めた吉田豊辰（とよとき）より野崎家に贈られた。豊辰は晩年吉備津神社の宮司を務めた。

（箱蓋表） 将軍家齊公御筆御扇子

（箱蓋裏貼紙）

此徳川将軍家齊公御舞御扇子ハ廣島縣備後國／深津郡福山西町居住士族正八位吉田豊辰氏ヨリ／明治二十二年三月十八日拙者初老祝年ノ歡トシテ贈與アリタルモノナリ野崎家永遠ニ保存スベシ／明治二十二年八月八日／野崎武吉郎

国立能楽堂『備前池田家伝来 野崎家能楽コレクション』pp.98,117、日本芸術文化振興会、2017年掲載。



(表・裏)「軍扇」
「采幣」

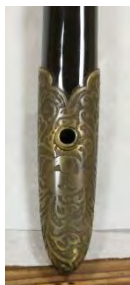


だれか決まった作家というわけではないが、ずいぶん凝った作りの軍扇と采幣（配）が1セットある。

日の丸扇はそれぞれ金地に紅色の円、紅地に金色の円を描き、親骨には金の金具で左三つ巴紋に猪目透かし、そして獅子がついた豪華仕様。

采幣は細長く切った和紙を束ねてふさとして、持ち手のところには金具と左三つ巴の紋が据えられる。

これらは同じ箱に収められており、両方とも軍事用の道具であるが、野崎家が戦に行くというのにはあり得ないし、鑑賞用であろうがどのような経緯で得たかは不明。



5. 来舶作家と野崎家

ちょうど本展覧会より以前、岡山大学大学院社会文化科学研究科では、「野崎家研究プロジェクト」という活動がなされ、様々な報告もあった。「近代東アジアネットワーク」の調査の中で野崎家が調査対象になりうるくらいには、来舶清人が多かったということが明らかになった。野崎家は塩業家として成功を収めており、実業家としての手腕によって、中国から政治家や実業家が視察来邸し、また中国文化の知識をはじめ詩書画や茶のような風流に親しむ文化理解者としての面により来邸する人もあった。そういうわけなので、野崎家が所蔵する中国人の作品についてもある程度の層を持った一分野として紹介することができるだろう。

参考：遊佐徹 [特集 瀬戸内の塩が育んだ近代東アジアネットワーク—児島、野崎家に集った「人」と「書画」一序] (岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第17号、2018)



胡鉄梅（こ てつばい） 道光 28 年～光緒 25 年（1848-1899）

「柘榴小禽図」 多子圖／胡鉄梅寫

安徽省桐城市生、日本人女性と結婚し、のち来日して日本で画名が高まった。野崎家にもいくつか作品を残す。ザクロはその種子を多くつけることから、豊作や多子を暗示する。



衛鑄生（えい ちゅうせい） 清時代

「初夏七絶詩」光緒 7 年（1882）

別院／深〃／夏簟／清石／榴花／發透／簾明／樹陰／滿地／日卓／午夢／覺流／鶯時
／一聲／光緒壬午之秋／書於槩浦客邸／江東衛鑄生

夏の夢のひとつきを詠う詩に、さわやかな青地に金砂子をちらした扇子がおしゃれ。



文廷式（ぶん ていしき） 咸豊5年～光緒30年（1855-1904）

「古詩」

及孝／宣承統纂脩／洪業／亦講論六藝／招選／茂異而蕭望／之梁／邱賀夏侯勝／韋成
／嚴彭祖尹更／始以／儒術進／庚子脩禊日／文廷式

文廷式は進士に2番の成績で及第、翰林院侍読学士まで昇進した。東亜同文会（初代会長・近衛篤磨）とのかかわりの中で来日し、東京麹町の野崎武吉郎邸も訪問している。

約2000年ほど前に成立した中国の歴史書『史記』より巻112・平津侯主父列伝の部分を引用したもの。明治33年（1900）3月2日の『近衛篤磨日記』において、篤磨と武吉郎、武吉郎が援助していた白岩龍平、野崎家の理事でもあった田邊為三郎、野崎邸執事の手島知徳が酒席に同席したおり、揮毫を頼んだところ十数葉がたちまちにできたとされ、本作品はその席で書かれたものであろうか。「起句書し終はれば承句既に成る。其速かなる事驚くべし。清国一流の学者たる事は疑ふべからず。」との評が記録される。

参考：遊佐徹「文廷式の来日と孫文」岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第16号、2017。



王治本（おう じほん） 咸豊 5 年～光緒 30 年（1836-1908）

「秋燕七絶詩」

号は茶園（漆園）、王仁爵の兄。明治 15 年（1882）には日本全国漫遊し、各地で書を残したという。明治 40 年（1907）73 歳で長崎に没するまで 4 回、あわせると 10 年ほど日本全国を旅していた。野崎家には、明治 18 年（1885）8 月 20 日の来訪記録が残る。



王仁爵（おう じんしゃく） 道光 23 年～光緒 20 年（1843-1895）

「美人七絶詩」 光緒 13 年（1888）

美人終古／怨飄／淪幾何承／恩近／至尊試看／馬嵬／埋玉侯不／如荆／布老蓬門／戊子春王仁爵

楊貴妃ほど美しい人が落ちぶれるのを恐れ、権力者に近づき多大な恩恵を受けたが、最後はどうなったものか、妻たるものはつつましく生きるのがいい、という教訓なのだろうか。

王治本の弟。日本全国を漫遊しており、野崎家には明治 21 年（1888）3 月 4 日から 5 日にかけて近隣の旅館に投宿、来訪。



張之洞（ちょう しどう） 道光 17 年～宣統元年（1837-1909）

「范文正公嘆稱詩」（平成 31 年野崎家カレンダー 11・12 月採用）

范文正公在當時／諸公／間第一品人也故／余每／於人家見尺牘寸／紙未／嘗不愛
賞弥日想／見其／人所謂先天下之憂／而憂／後天下之樂而樂／此文／正飲食起居
之間先／行之而後載於言者也／之洞

張之洞は中国清時代末期の政治家。科挙に合格して探花（第一甲）として最高の学問と人材に代表される翰林院に入る。日清戦争後、日本を通して西洋を学べと、清国エリートの日本留学ブームを起こした（孫倩「清国人の日本留学に関する一考察—1890 年から 1910 年まで」早稲田大学大学院社会科学研究所編『社会学研論集』Vol.18、pp.188-203、2011 年。）。

宋代の名臣と仰がれた范仲淹を讃えた散文が金の扇面に整然と書かれる。親骨には唐子が湯を沸かしてお茶を煮る仕事に勤しむ姿など山水人物が彫刻されている。范仲淹（はんちゅうえん）は 11 世紀頃・北宋時代の政治家。岡山の「後樂園」は『岳陽楼記』中の「天下の人の憂うるのに先立って憂い、天下の人の楽しみに後（おく）れて楽しむ」（先憂後楽）の文に由来する。文正公は死後に贈られた名前。

さて本稿を作成中に、本作は北宋の黄庭堅（号：山谷）「跋范文正公帖」の文章から採用されたものと分かった。『欽定四庫全書』の「山谷集卷三十」に収録されているのでそちらで参照することができる。見直したところ、漢字の読みを 2 文字間違えていたので、もしカレンダーを保存されている方があればお手数ながらご確認頂けると幸いです。

6. おわりに

いろいろなことを調べられる環境が整えられて、知らなかったことや考えていなかった部分から情報が浮かび上がることがある。扇というのは手軽なものだから、相手と直接に交流して手に入れやすい。もちろん購入するものもあるが、コミュニケーション手段としてのそれ自体で、人の行動を追いかける手がかりになるだろう。それらを見たり考えたりするだけでも、野崎家についての理解を深めることになる。扇子や扇面だけで約 600 点、そしてそのあとにも未分類の扇子はいくつか出てきている。今回は見て楽しみやすいと思ったものを独断で選んだわけだが、ほとんど絵画が中心となっている。書が少なかったのは私が読めないからである。昔の人たちは書画一致の考えを信条にしていることが多いので、一流の文化人たるもの絵が描けるなら書も達筆であらねばならぬ。両方している人もいるのである。つまり両方理解できなければ片手落ちであろう。そちらも含めての調査は今後の課題としたい。

ただ、今回の展示方法については、構想から設置やフォローまで何かと周りに助けられたが、再考すべきところもある。壁にボードを支えかつ吊るし、アクリル台を打ち込んでという方法だったが、会期中何度もアクリルが重くて落ちるということがあった。拾っては直すということを繰り返したが、高さのある場所から落ちているのだから、作品にとって良かったはずがない。大いに反省しなければならない。そのようなこともあったので、たくさんの扇子の展示というのはそれを解決する方法を考えてからとなろう。

本展示は見て楽しめるよう企画されたはずなので、また展示の機会も多くはなかったので、写真を多用した見る報告という趣向で書いた。写真は稿者が撮影しているので見苦しい部分があるが、ご了承いただかざるを得ない。所蔵する扇の十全たる紹介とはならないが、これをもって本企画展の内容を兼ねての報告とする。

展示から展示中のフォローまで手間をかけた当館職員、外部学芸員の方からのご助言・ご協力に感謝申し上げます。